

令和 5 年 6 月 3 日現在

機関番号：34315

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2022

課題番号：17K01654

研究課題名(和文) 体育授業研究におけるナラティブ・アプローチ - 実践記録とその書き直しに着目して -

研究課題名(英文) Narrative Approach in P.E. Lesson Study - Focusing on Practice Records and Its Rewriting -

研究代表者

石田 智巳 (Ishida, Tomomi)

立命館大学・産業社会学部・教授

研究者番号：90314715

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、体育科教育学研究におけるナラティブ・アプローチの可能性を探ることを目的として行われた。とりわけ、授業に対する体育教師(保健体育教師)の語りや信念(記述を含む)が何をきっかけとして変化するのかに焦点を当てた。分析したのは、中学校のバレーボールの授業、小学校のバレーボールの授業、体育教師の実践記録などであった。その結果として、子どもの抵抗、授業で起こった矛盾や困難が起こること、そしてそれを記述することがナラティブの変容には必要不可欠であることが明らかになった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

従来の教材研究は、授業で起こるであろう矛盾や困難をなるべく避けて、子どもたちが効率よく学習できることを目的として行われてきた(岩田, 2012)。そういった側面の必要性を認めつつも、本研究が明らかにしたのは、矛盾や子どもからの抵抗など授業で生じた問題を子どもと教師がともに解決しようとする中で、子どもたちが発達を遂げること、教師のそれまで持っていた信念が変容することである。なお、矛盾は子どもたちのスポーツ観や学習観のズレによるものや、教師の意図と子どもの実際のズレなどがあり、予測するのは難しいが、矛盾や困難こそが教師と子どもを成長させるという認識が今後必要となる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to explore the possibility of a narrative approach in physical education research. In particular, I focused on what triggered changes in the narratives and beliefs (including written descriptions) of physical education teachers about classes. The analyzes included junior high school volleyball classes, elementary school volleyball classes, and physical education teachers' practice records. As a result, it became clear that children's resistance, contradictions and difficulties in class are indispensable for the transformation of narratives.

研究分野：体育科教育学

キーワード：ナラティブ・アプローチ 体育・保健体育

1. 研究開始当初の背景

近年、教育学のみならず、医療、看護、心理、福祉などでナラティブ・アプローチの実践・研究が行われてきている。ナラティブといえば、「語り」や「物語」の両方の意味を持つが、このナラティブが日本の教育学研究の方法や対象として意識されるのは、2000年代になってからである(日本教育方法学会, 2014)。1990年代になると、心理学研究では、質的な方法に中心が変化してきており(ナラティブ・ターン)、同時期に教育学研究(授業研究)でも質的な研究に光が当てられるようになった。しかしながら、佐藤学(2009)は、次のように述べている。

「授業研究のパラダイム転換は、もう一方で『語り(narrative)』をドキュメントとする研究も準備しているが、なぜか日本において文字による授業の実践記録や教師の語りを対象とする授業研究は、欧米ほどに発展していない。日本には大正期以来の教師の語りと実践記録という豊かな専門家文化の伝統があるにもかかわらずである(佐藤(2009)『日本の授業研究』上巻, p.110)。日本では、1920年代に教師が実践記録を綴り授業研究の素材としたとされ(浅井, 2007)、必ずしも主流の方法とはいえないまでも今日まで続いている。実践記録のなかに、教師や子どものナラティブとその変化を分析した研究は、近年の教育学研究においても散見される(中村, 2011; 田中, 2014; 石田, 2015)。しかしながら、実践記録そのものを教師のナラティブとして対象化した研究は管見の及ぶ限り見当たらない。実践記録はかつて、その主観性、呪術性などが批判の対象とされ(清水, 1955)、60年代になると授業研究そのものが実証的な研究(規範的アプローチ)に取って代わられることになった。そのため、実践記録の意義や根拠が坂元(1980)、大西(1983, 1991)らの少数によって語られるに過ぎなかった。しかしながら、彼らもまた、教師のナラティブという文脈では実践記録を読んでいない。

ナラティブという視点が、教育や医療、心理療法など臨床現場で有効となるのは、単に語ることだけではなく、「最初のナラティブを語り直す」ところにある。ナラティブ・アプローチでは、自己肯定感の持てない子どもたちに、教師やカウンセラーなどがその物語を変えるための手助けをするという実践が紹介される(前掲の、中村, 2011; 田中, 2014; 石田, 2015など)。実践記録は、教師が一人称で実践を語り、この語り直しを教師自身がすることになる。この実践記録の書き直しによる信念の変化こそ、ナラティブ・アプローチであり、この「語り直し=書き直し」のプロセスの解明が求められる。

2. 研究の目的

本研究では、体育科教育学研究におけるナラティブ・アプローチの可能性を探ることを目的とした。とりわけ、体育教師(保健体育教師)、そして体育科教育の研究者の語りや信念(記述を含む)、が何をきっかけとして変化するのかに焦点を当てた。分析したのは、(1)中学校の保健体育教師のバレーボールの実践記録、(2)中学校の保健体育教師の実践記録集、(3)小学校のソフトバレーボール実践の計画、実践への参加、研究会での報告などへの参与、(4)体育科教育学研究者の信念の変容を対象とした。

3. 研究の方法

研究方法は、(1)体育実践記録の入った文献を読み込んで分析する方法と、(2)すぐれた実践記録を書く教師の実践に密着して、授業への参与観察、研究会への参与観察、教師へのインタビューなどエスノグラフィックな方法、(3)歴史実証的な方法を取ることにした。

4. 研究成果

研究期間中に発表した主たる論文は以下の通りである。

- (1)石田智巳(2018)「体育実践にナラティブ・アプローチを読み取る - 矢部英寿のバレーボール実践記録より - 」、『立命館大学産業社会論集』第54巻第3号, pp.1-12
- (2)石田智巳(2020)「『認識の節』について: 佐々木賢太郎と紀南作文教育研究会の議論」、『体育学研究』65巻, pp.89-105
- (3)石田智巳(2021)「京都支部のソフトバレーの実践より」、『たのしい体育・スポーツ』, 318, pp.64-67
- (4)石田智巳, 制野俊弘(2022)「丹下保夫の運動文化論構築過程における春田正治の影響: 春田 - 丹下論争について」、『体育学研究』67巻, pp.845-857

(1)では、中学校の保健体育教師によるバレーボール実践記録にナラティブ・アプローチを読み取ることを目的とした。その結果、「ドミナント・ストーリーとオールタナティブ・ストーリー」、「問題の外在化」、「語り直し」が実践記録に見られた。この実践では、子どものスパイクを打ちたいという抵抗にあい、「ラリーか、スパイクか」という議論を通じて、子どもたちが目指すバレーボールを構築していく課程で、ラリーを中心とした教師の指導の信念もまた変容していくこととなった。

(2)では、戦後すぐに生活綴方を用いた保健体育教師である佐々木賢太郎の実践記録を中心

に分析を行った。佐々木は1952年以来、子どもの認識を大切にしたい指導を行ってきたが、1959年に「発見、照合、確認、創造」という「認識の節」として定式化することになった。この変化が何によるものなのかを諸史料をもとに跡づけた。結論としては、1958年の学習指導要領の改訂（法的拘束化）、同年に和歌山県で起こった勤務評定闘争など教育行政の締め付けによって、これまでの佐々木自身や所属した研究会の実践を見直す中で、定式化されたことを明らかにした。

（3）では、小学校のソフトバレーボールの授業において、計画、実施、研究会での報告、そして総括に参加して、教師の信念の変容を明らかにした。教師は実践のねらいをスパイクよりも「つなぐ」ことにおいていた。そのため、子どもたちがつなぐようになることを期待して、「つなぎポイント」という自陣で3回（以上）つないだら入るポイントを授業でカウントすることにした。しかしながら、1つのグループを除く5つのグループではつなぐことよりも勝つことを優先させた。なぜならば、つなぎポイントはカウントするものの、勝敗とつなぎポイントは関係がなかったからである。そこで、教師はつなぎポイント×2を得点に加えることにした。それにより、子どもたちはつなぐことを意識し始めた。しかし、今度は3回つないだら相手に返さずにラリーを止める子どもたちが出てきた。（1）の実践もそうであるが、教師の信念の変容は、授業で生じた矛盾や困難に向かい合うこと、そしてそれを記述することでなされることが明らかになった。

（4）では、1950年代から60年代に活躍した体育科教育学研究者（体育原理研究者）であった丹下保夫が運動文化論を構築していく課程でその思想が変化していく様子を跡づけた。丹下は、50年代は生活体育論を標榜し、民主的な人間形成（社会性）を大切に、グループ学習、行事単元を実践していた。1950年代の後半になるとそこに技術指導が入ってきて、1960年には「子どものよるこびを高める」技術指導の研究へ向かうが、1963年には運動文化の「批判的摂取」、「運動文化とその体制の構築」と思想を変化させていった。そこには、日本生活教育連盟の委員長であった春田正治との論争によって思想を鍛えていったことを明らかにした。

以上の研究をまとめると、教師の信念の変容には、（1）授業において生じる矛盾に向かい合うこと、（2）自分自身の実践を反省的に振り返らざる場面に出会うこと、（3）自分の思想への批判を真摯に受け止めることなど、これまでの信念を揺るがす困難な状況にであうこと、そしてそれを記録することが必要であることが明らかになった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計13件（うち査読付論文 3件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 石田智巳, 制野俊弘	4. 巻 67
2. 論文標題 丹下保夫の運動文化論構築過程における春田正治の影響：春田 - 丹下論争について	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 845-857
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/jjpehss.22047	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 322
2. 論文標題 「GIGAスクール構想」を検討する	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 60-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加登本仁	4. 巻 31
2. 論文標題 幼児の休日の運動機会に関する調査研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 児童教育研究	6. 最初と最後の頁 13-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 79
2. 論文標題 体育で大切にしたいこと - 学びの事実に目を向ける -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 わかやまの子どもと教育	6. 最初と最後の頁 3-7
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 中野真雄・竹谷寛子・石田智巳	4. 巻 313
2. 論文標題 京都支部のソフトバレーの実践より	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 64-67
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 65
2. 論文標題 「認識の節」について：佐々木賢太郎と紀南作文教育研究会の議論	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 体育学研究	6. 最初と最後の頁 89 105
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.5432/jjpehss.19069	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 54
2. 論文標題 体育実践にナラティブ・アプローチを読み取る - 矢部英寿のバレーボール実践記録より -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 立命館産業社会論集	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 山本穂波・八田篤司・加登本仁	4. 巻 68
2. 論文標題 中学校マット運動の授業における「対話的学び」に関する事例研究	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 滋賀大学教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 23-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 1200
2. 論文標題 体育科における「深い学び」とは	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 学校教育	6. 最初と最後の頁 6-13
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 石田智巳	4. 巻 65(4)
2. 論文標題 「資質・能力」論が体育授業にもたらす影響	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 42-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加登本仁	4. 巻 34
2. 論文標題 次期学習指導要領と異質協同のグループ学習	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 運動文化研究	6. 最初と最後の頁 25-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 加登本仁	4. 巻 301
2. 論文標題 アクティブ・ラーニングと私たちのグループ学習	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 たのしい体育・スポーツ	6. 最初と最後の頁 52-55
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 制野俊弘	4. 巻 66(3)
2. 論文標題 継承される教師文化 - 主体的・対話的に学び合う教師たち	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 体育科教育	6. 最初と最後の頁 38-47
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 石田智巳
2. 発表標題 理論研究とその方法
3. 学会等名 日本体育科教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森敏生, 石田智巳, 丸山真司, 玉腰和典
2. 発表標題 体育授業における技術認識と集団関係の変容 - グループ学習を手がかりに -
3. 学会等名 日本体育科教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 森敏生, 丸山真司, 石田智巳, 玉腰和典
2. 発表標題 体育授業における技術認識と集団関係の変容 - グループ学習を手がかりに -
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅原久嶺・加登本仁
2. 発表標題 運動感覚に着目した中学校短距離走指導に関する事例研究
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第38回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 山本穂波・加登本仁
2. 発表標題 中学校マット運動の授業における「対話的な学び」に関する事例研究
3. 学会等名 日本スポーツ教育学会第37回大会（茨城大学）
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計3件

1. 著者名 石田智巳ほか	4. 発行年 2022年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 336
3. 書名 日本の民主教育2021	

1. 著者名 石田智巳 神谷拓 伊藤嘉人 制野俊弘 玉腰和典 矢部英寿 久保田治助 中西匠 小山吉明 堀江なつ子	4. 発行年 2017年
2. 出版社 学事出版	5. 総ページ数 176
3. 書名 対話でつくる教科外の体育 学校の体育・スポーツ活動を学び直す	

1. 著者名 石田智巳 田中新治郎 丸山真司 黒川哲也 中瀬古哲 制野俊弘 則元志郎 大貫耕一 竹内進 加登本仁 佐藤亮平 竹田唯史 玉腰和典 中西匠 林俊雄 久保健 森敏生 神谷拓 矢部英寿 平野和宏	4. 発行年 2018年
2. 出版社 創文企画	5. 総ページ数 212
3. 書名 スポーツの主人公を育てる体育・保健の授業づくり	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	加登本 仁 (Kadomoto Hitoshi) (40634986)	安田女子大学・教育学部・准教授 (35408)	
研究分担者	制野 俊弘 (Seino Toshihiro) (70795153)	和光大学・現代人間学部・教授 (32688)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関		
米国	California State University Long Beach		